

痛み止めの胃腸障害

【解熱鎮痛剤の副作用は？】

解熱鎮痛剤は肩、腰の痛みやカゼの喉の痛み、頭痛に対して日常的に使われています。最近ではドラッグストアなどで気軽に購入できるようになっています。

解熱鎮痛剤には胃潰瘍という副作用があります。解熱鎮痛剤は痛い場所のプロスタグランジンという物質を減らすことで炎症や痛みを和らげますが、胃の粘膜のプロスタグランジンが減ると胃酸が増える、胃粘膜の防御機能が落ちるなどの理由で胃潰瘍がでやすくなります。

【解熱鎮痛剤による胃潰瘍の症状は？】

痛み止めによる胃潰瘍ではお腹の痛みが出にくい、という特徴があります。主な症状は、胃がムカムカしたり、食欲がなくなったりすることです。

潰瘍から出血して、血を吐いたり、真っ黒い便が出たりすることがあります。その場合は緊急で胃カメラを行い、血を止める必要があります。また、稀に胃に穴が開いたりすることもあります。その場合は開腹手術が必要となることもあります。

【どんな人が解熱鎮痛剤で胃潰瘍になりやすい？】

65歳以上、胃・十二指腸潰瘍になったことがある人、高用量または2剤以上の解熱鎮痛剤を飲んでいる人、ステロイドの内服治療を受けている人、抗血栓療法（特に低用量アスピリン）を受けている人は解熱鎮痛剤で胃潰瘍になりやすいと言われています。

【予防の方法は？】

プロトンポンプ阻害剤という胃酸を減らす薬や、ミソプロストールという胃粘膜のプロスタグランジンを増やす薬によって予防できます。胃潰瘍を患ったことがある方、低用量アスピリンなどを服用中の方は特にリスクが高いため、予防的にこれらのお薬を飲むことをお勧めします。

また、選択的 COX-2 阻害剤という種類の解熱鎮痛剤では胃潰瘍が起りにくいとされています。

痛み止め内服中に胃の調子が悪くなったときは主治医にご相談ください。また、胃の症状が起りがちな方は安心して鎮痛剤を飲むためにも内視鏡検査（胃カメラ）をお勧めします。